『境界研究』特別号（2013）pp. 87-98

ウラジオストク 2012 年
―― APEC サミット開催と境界の変容――

ポール・リチャードソン

はじめに

本稿は、国家の主導する野心的な戦略によって、ロシアとアジア太平洋地域の境界を越え、変容を続けるウラジオストクに焦点を当てる。昨今、ウラジオストクは、その境界が様々な方法、コンテクスト、スケール、時期において、いかに(再／脱)物質化されてきたか(re/de-materialise)を考えるに魅力的な事例となっている。本稿では、社会的諸関係における複雑さと緊張を明らかにするため、境界の象徴的表象に焦点が当てられるが、国家が、境界や境界地域を、そこに暮す人々の理解や経験とは鮮烈に異なるかたちで作り出すことが浮き彫りにされよう。筆者は、境界の(再／脱)物質化については、ニック・メゴランの次の考え方を援用している。「このようなアプローチは境界の機能と効果の微妙な変化の仕方に対して敏感といえる。これは国境が社会生活により生み出されるとともに社会生活を生み出す様態を描き出す。それゆえ、国境は、そうでなければ見逃されがちな社会的プロセスの広がりを可視化する強力な地理学的レンズとなる」[(1)]。

本稿は、境界地域が有する、政治、アイデンティティ、社会、ビジネスにとって重要な意義をもつ場所(locales)としての機能を分析するとともに、その場所が予測不能な変化を起こす様態について例証する。

境界に対する本稿の理論的前提は、領域のもつ境界線(territorial boundaries)に関する近年の地理学の成果に基づく[(2)]。それによれば、諸国の境界とは政治・経済・社会情勢などのコンテクストの特徴及び社会権力関係に深く規定されており、その意味合いは国家と結びついた社会的関係性の状況に応じて変化するとされる[(3)]。したがって、本稿はモスクワの主導する国家開発戦略のコンテクストのなかで、ロシアの国家と社会の関係を分析するが、どのようにウラジオストクが戦略のシンボルとなり、脱領域化(de-territorialisation)と

(1) Nick Megoran, “Rethinking the Study of International Boundaries: A Biography of the Kyrgyzstan–Uzbekistan Boundary,” *Annals of the Association of American Geographers* 102, no. 2 (2011), pp. 1–18.

(2) 以下の文献も参照。David Newman, “Boundaries,” in John Agnew, Katharyne Mitchell, and Gerard Toal, eds., *A Companion to Political Geography* (Oxford: Blackwell, 2003), pp. 123–137; Anssi Paasi, “A Border Theory: An Unattainable Dream or A Realistic Aim for Border Scholars?” in Doris Wastl-Walter, ed., *A Research Companion to Border Studies* (Aldershot: Ashgate, 2011), pp. 11–31.

(3) Paasi, “A Border Theory,” p. 27.

再領域化(re-territorialisation)のプロセスのなかで構築されたのかを主に解析したい。

そもそも脱領域化とは、グローバル化の進む世界で、物質化しているものの想像上の産物でもある境界が消失しうることを示す広義の概念であり、再領域化とは、新たな境界や境界地域空間が増殖することを意味する対概念である[(4)]。 アンジ・パッシによれば、両者とも様々な制度的な慣行や言説から派生したもので、経済・文化・政治に関わる権力関係を示している[(5)]。またどちらのプロセスも継続するため、重複化したり、途切れたりすることで、十分に複雑な境界空間をより多様なものにしてしまう。

本稿では、この複雑さに焦点を当て、あるタイプの境界の脱物質化が別のタイプの境界の物質化を引き起こす様態を分析する。ここでは脱物質化は境界のレトリカルかつ物質的な脱構築を意味される。議論されるべきことは、政府によってウラジオストクで主催された、とある大きなイベントが国家の刷新された利益にかかわる言説で飾られ、ロシア極東をアジア太平洋へと統合するために必要なインフラストラクチャおよび法制度の諸改革がなされたことだろう。大統領のスピーチといった言葉のみならず、国際輸送施設の建設や韓国とのビザ免除制度の導入といった制度的な面も含めて、ロシア政府はウラジオストクをアジア太平洋に開こうとする姿勢をみせていた。しかし、境界と境界地域が様々な場所とスケールで無数の様態として表象されるとすれば、ウラジオストクなる境界地域で、モスクワの国家エリートたちが主導する国家発展戦略と地方が現地で有している境界的な諸文化がどのように交錯しているのかも問われなければならない。

クリス・ラムフォードによれば、「人々は自ら思うように境界のスケールを構築できる。『地方』の現象としても、国民国家の『縁(edge)』としても、あるいはトランスナショナルな足場としても。そう境界は入り口(portal)としても設定し直せる」[(6)]。本稿は、「中央」と「周縁」の双方におけるロシアの境界地域の様々な構築とイメージを取り扱うとともに、これがいかに国家の次元において、また日常生活において議論の対象とされているかを抽出する[(7)]。境界地域をめぐる様々な表象の検討を通じて、国家発展戦略やエリート主導の国家観(national destiny)も描くことができ、同時にそれが違う空間スケールでは異議申し立てされていることが理解されよう。かかるコンテクストにおいて、境界は「もはや地図上の単なるラインではなく、(『境界地域』といった概念のように)正当な空間及びプロセスとして」捉えられる[(8)]。

境界地域の空間としての場所性(sites)は、舞台としての役割も果たしている。「そこで

(4) *Ibid*., p. 18.
(5) *Ibid*.
(6) Corey Johnson, Reece Jones, Anssi Paasi, Louise Amoore, Alison Mountz, Mark Salter and Chris Rumford, "Interventions on Rethinking 'the Border' in Border Studies," *Political Geography* 30, no. 1 (2011), p. 67.
(7) *Ibid*., p. 61.
(8) *Ibid*., p. 67.

は、アイデンティティが演出され、広められ、分かち合われ、再生産される。[……]より広く象徴化しうるアイデンティティとこの特別な舞台が一部となる想像的地理空間が描き出される(map out)」[9]。本稿は、国家及び地方のエリートたちがそれぞれのアイデンティティや国家観を打ち出すことで、境界のもつ場所性を高度に政治化したものへと転化させていくプロセスにも注目する。2012年にウラジオストクで開催されたアジア太平洋経済協力(APEC: Asia-Pacific Economic Cooperation)サミット(APEC2012)に焦点をあてることで、サミットがいかにロシアにとってのナショナル・アイデンティティの鼓舞にインパクトを与えたのかを概観したい。ロシアの指導者たちは、構築された舞台上で修辞的な言葉や行動を用いることによって、ロシアがアジアの刷新された経済的・地政学的なパワーたることを宣言しようとした。この言説のなかで、ウラジオストクは発展したインフラストラクチャを持つだけでなく、ダイナミックなアジア太平洋地域の入り口、すなわち、アジア太平洋地域に対する国境を脱物質化させる象徴としても位置づけられていた。かつて冷戦期にはハードな境界地域として表象されていた場所が、いまやまったく正反対の、いわばアジア太平洋への「ゲートウェイ」や「窓」として描かれるようになった。

しかしながら、APEC2012にかかわる散漫な構想や建造物は、現地の境界的な諸文化が求めるものを見落とし、無視し、歪曲するという代価を払うことになった。そもそも、境界の意図された脱物質化は必ずしもロシアの広大な領域全体に適用されたわけではなかった。また構築された舞台での、国家主導のプロセスに対する反応は、アイデンティティや境界地域に関わる現地なりの理解が存在すること、これをトップダウンで動かそうとすることへの拒絶と憤懣を浮き彫りにしていく。国家がアジア太平洋地域との境界を再構成しようとしたことで、逆に国内の中央と周縁の関係性も再考され、それが壊れるような作用も働いた。ウラジオストクを、ロシアのアジアに対するプレゼンスと開放性のシンボルとしようとする試みは、国のなかに中央と周縁の新たな観念的な境界を生み出してしまった。

1. 変化する境界地域ウラジオストク

ロシア極東の港湾都市ウラジオストクは、中国との国境から50kmと少し離れた位置にあり、50万人規模のロシアの都市として、日本と韓国の市場、大都市圏、産業中心地に最も近い位置にある。ウラジオストク市は1860年に開基して以来、国境貿易と移民の流入が比較的に自由な時期と、外部との関係が厳しく制限され、国境通過の際に厳密な統制が敷かれた時期とに分けることができる。前者は、ウラジオストク市開基から1920年代にソ連が強化されるまでの期間と、1980年代後半から今日までに代表される。後者は、ウラジオ

(9) Tim Edensor, *National Identity, Popular Culture and Everyday Life* (Oxford: Berg, 2002), pp. 69–70. 彼は明確に国境を論議していないが、国境を舞台とみなし、「象徴的場所」と定義している。

ストクが外国に閉ざされた1930年代からソ連崩壊までの期間を指す[10]。

しかし、ソ連期でも、ウラジオストクは国家の改革と軌道修正を試みる舞台として使われた。1959年、ニキータ・フルシチョフは米国への初公式訪問後にウラジオストクを訪れ、明らかに米国西海岸に感銘を受けたのだろう、ウラジオストクを「我らのサンフランシスコ」にすると住民に訴えた[11]。彼の声明は、地元の造船工場でなされたが、間もなく「大ウラジオストク」に生まれ変わるための大規模建設事業が行われた[12]。

ケーブルカーが作られ、質の悪いアパートが急増したのも、フルシチョフの熱意の成果であった。しかし、太平洋艦隊の基地として、ウラジオストクは閉鎖軍港にとどまり、国家の新しい方向性を示す場所として首脳部の注目を再び集めるのは1980年代後半になってからである。1986年7月、ミハイル・ゴルバチョフはウラジオストク訪問の際、アジア太平洋地域へソ連が関与すべき新時代が到来したという著名な演説を行った。彼は、冷戦を終結させ、ソ連政府はウラジオストクを対外開放し、アジア太平洋地域の幅広い経済の一環として発展させるに努めることを強調した[13]。ゴルバチョフは、ウラジオストクを軍事力の前哨基地から、新しく導入された情報公開とペレストロイカを象徴する都市へと生まれ変わらせようとしていた。

しかしながら、ウラジオストクの開放は、1991年の劇的かつ唐突なソ連崩壊とともに実現したにすぎない。国家の瓦解と、これに伴い中央権力による支援の著しい低下は、特にロシアの遠い辺境に悪影響をもたらした[14]。主要な問題は、政府が助成してきた産業や公共事業の衰退、軍事力の低下、失業者の増加、物資や人の移動をめぐる境界の喪失、公権力及び法執行力の衰退、天然資源の無統制の搾取、汚職の悪化、経済界・政界における犯罪の高まりなどであった[15]。1991年から2012年の間、ロシア極東全体で悪化する経済状況と雇用環境の見通しの暗さを見限った移住者の流出は止まらず、出生率も大幅に下がる。その結果、人口の約五分の一が失われた[16]。

ウラジオストクやロシア極東にとって、1990年代を、モスクワによって無視され、関係が断絶していた時代とみなせば、2000年にウラジーミル・プーチンが政権に就いたことは新たな誓約の始まりであった。2000年代初頭から、中央政府はその影響力を取り戻し、

(10) Artyom Lukin and Tamara Troyakova, “The Russian Far East and the Asia-Pacific: State-Managed Integration,” in Rouben Azizian and Artyom Lukin, eds., *From APEC 2011 to APEC 2012: American and Russian Perspectives on Asia-Pacific Security and Cooperation* (Vladivostok: Far Eastern Federal University Press, 2012), p. 190.

(11) Irina Filatova, “Khrushchev’s San Francisco,” *St. Petersburg Times*, November 2, 2011 [http://sptimes.ru/index.php?action_id=2&story_id=34771] (2013年6月9日閲覧).

(12) *Ibid.*

(13) Lukin and Troyakova, “The Russian Far East and the Asia-Pacific,” pp. 192–193.

(14) *Ibid.*, p. 193.

(15) *Ibid.*, p. 194.

(16) Программа развития Дальнего Востока отослана на доработку — расходы оказались “неадекватными” // newsru.com. 20 февраля 2013 [http://newsru.com/finance/20feb13/fareast.html] (2013年6月9日閲覧).

2001年初頭、辛辣で異論の多かった、沿海地方知事エヴゲニー・ナズドラチェンコを、即刻かつ劇的に解任した[17]。さらに、プーチン大統領は初任期終了間際に、2013年までの莫大な国家予算を用いたシベリアと極東の大規模な国家開発戦略を発表する[18]。そして2007年9月、APECシドニー・サミットの場で、彼は2012年にウラジオストクでサミットを開催すると明言した。

基本的なインフラストラクチャが十分に整備されているとはいえない都市でサミットを開催するという彼の提案は、内外に大きな驚きを与えた。プーチンはここで、ロシアをアジア太平洋へと開く重要性を語り、APECサミット招致の決断を正当化した[19]。サミット開催へ向けロシアが示した優先事項のなかには、アジア太平洋地域における貿易・投資のさらなる自由化及び一層の経済統合、「革新的成長」を促進する取り組み、交通・物流の向上が含まれていた[20]。要するにサミットの誘致は、ロシアとアジア太平洋地域の経済的・政治的な境界を取り払う、あるいは、脱物質化しようとする試みであるとともに、境界地域の開発や市民向けサービスとインフラ整備を進めようとする意欲をもアピールしていた。最も重要な点は、政府がこの約束を実行できる財源を示し、ウラジオストクをサミット開催地にするべく、総額210億ドルもの連邦予算を費やしたことにある[21]。

建設事業計画として、700億ルーブル(22億ドル)[22]を費やす最高水準の広大な大学キャンパス、大規模な三本の橋梁(うち一本は経費322億ルーブル[10億ドル]の世界最長の斜張橋)、一棟で85億ルーブル(2億6,700万ドル)を費やす高級ホテルを二棟(サミットまでにどちらもオープンできず)、全長15kmの道路、新空港ターミナルや空港連絡鉄道の建設が盛り込まれた[23]。サミットのためオペラハウス建設も計画されたが、オープンは2013年秋までずれ込んだ。この劇場は連邦予算から25億ルーブル(約8,000万ドル)、さらに地

(17) Steven Fish, "Putin's Path," *Journal of Democracy* 12, no. 4 (2001), pp. 71–78.

(18) Программа "Экономическое и социальное развитие Дальнего Востока и Забайкалья на период до 2013 года" // Министерство экономического развития Российской Федерации. 21 ноября 2007 [http://www.economy.gov.ru/minec/activity/sections/econreg/investproject/doc2010011212] (2013年6月12日閲覧).

(19) Lukin and Troyakova, "The Russian Far East and the Asia-Pacific," p. 195.

(20) *Александр Габуев.* "АТР превратился в локомотив развития всего мира" // Коммерсант.ru. 29 ноября 2011 [http://www.kommersant.ru/doc/1826725] (2013年6月9日閲覧); Viacheslav Amirov, "Russia, Japan, and the Asia-Pacific," in Azizian and Lukin, eds, *From APEC 2011 to APEC 2012*, p. 130.

(21) ちなみに、これは毎年ロシア政府が教育に充てる予算より顕著に大きい額である。"A Pleasure Too Costly," *Gazeta.ru*, September 7, 2012 [http://en.gazeta.ru/opinions/12/09/07/a_4758569.shtml] (2013年6月9日閲覧).

(22) 2012年APEC跡地を引き継いだ極東連邦大学のキャンパスは、ウラジオストク沖の景観の美しいルースキー島に位置する。五万人までの学生を収容でき、ロシアのみならず、アジア太平洋地域からの学生や学者を引きつける有数の教育機関・研究センターとしてデザインされた大学である(本稿に記載した、全てのロシアルーブル・アメリカドルの交換比率は2013年10月に換算されたもの)。

(23) *Лариса Ларина.* Владимир Миклушевский: "Я понимаю ваш скепсис, но я — оптимист" // Золотой Рог. 20 декабря 2012 [http://www.zrpress.ru/politics/primorje_20.12.12_58464_vladimir-miklushevskij-ja-ponimaju-vash-skepsis-no-ja--optimist.html] (2013年4月30日閲覧); *Александр Габуев и Олеся Герасименко.* Жизнь после денег // Коммерсант Власть. 9 сентября 2012 [http://kommersant.ru/doc/2270767] (2013年10月28日閲覧).

方予算から8億ルーブル(2,500万ドル)が費やされたと報告され、さらに1億8,000万ルーブル(570万ドル)の年間維持費が予測されている[24]。さらに、政府に認可された追加事業計画のなかには、都市へのガスパイプライン[25]、自動車組立工場[26]、沿海地方南部に建設予定の二棟の大造船所も含まれていた[27]。

サミットの準備期間中、ロシア政府は、APECの主催により、いかにロシアの威信が高まり、アジア太平洋地域との関係が変わるか、またウラジオストク市民の生活がいかに改善されるかを強調し続けた。大統領ドミトリー・メドヴェージェフ(当時)は高い事務レベルの現地訪問を何度も重ね、自ら建築現場を視察し、工事の進み具合を監督した。彼は2011年、「今後何十年・何世紀にわたり、我々の造った建造物が残されていることを願う」と述べたが[28]、翌2012年夏には橋の開通式に立ち会い次のように表明した。「我々がこの数年間に取組んできたことは全て、言うまでもなくAPECサミットと結びついている。しかし、それはサミットのためだけではない。ここに生きる我々一人一人のため、つまり、あなたのためである」[29]。サミット開催当時に大統領に復帰することになるプーチンもまた、開通式の前夜、次のように明言している。「五年前、このフォーラム会談のため参加国を招待したが、[……]私の真の目的は、ロシアのこの地域の重要性を認識させることだった」[30]。

2012年のAPECを使って、メドヴェージェフとプーチンが、ロシアとアジア太平洋地域の国境、およびその関係性を再定義する戦略を推進してきたことにより、この開発計画の成否そのものが彼らの政治的遺産(legacy)として残された。つまり、APEC終了後も、中央政府の関与は刷新されたかたちで続いている。例えば、2013年1月、第21回アジア太平洋議員フォーラム(APPF: Asia-Pacific Parliamentary Forum)がウラジオストクで開催され、アジア太平洋地域から各地の立法機関の代表が集結した。沿海地方議会の議長であり、与党・統一ロシア議員ヴィクトル・ゴルチャコフはこう述べている。

> 国家による一貫した東方政策である。[……]これはAPECサミット後、我が国がアジア太平洋地域への統合に向かう確固たる第二のステップだ。この会議がここで行われていると

(24) *Габуев и Герасименко* Жизнь после денег.

(25) Там же.

(26) ウラジオストクが自動車製造業を誘致した主要な動機の一つは、日本から輸入される比較的安価な自動車がもたらす損失を、地域に補填するためだった。そして2009年、関税引き上げ措置によって輸入自動車は大幅に減らされた。

(27) Artyom Lukin, “The Russian Far East: Developmental and Geopolitical Challenges” (paper presented at the ISA Annual Convention, San Francisco, April 3–6, 2013).

(28) Paul Richardson, “Russia in the Asia-Pacific: Between Integration and Geopolitics,” *Asia Pacific Bulletin* 150 (2012).

(29) Miriam Elder, “Russian City of Vladivostok Unveils Record-Breaking Suspension Bridge,” *Guardian*, July 2, 2012 [http://www.guardian.co.uk/world/12/jul/02/russian-vladivostok-record-suspension-bridge] (2013年4月20日閲覧).

(30) “Putin: Using Al-Qaeda in Syria like Sending Gitmo Inmates to Fight,” *Russia Today*, September 6, 2012 [http://rt.com/news/vladimir-putin-exclusive-interview-481/] (2013年4月30日閲覧).

いう事実がロシア政府による極東、沿海地方の発展を支援する意思の真剣さを明示している[31]。

ウラジオストクは2012年にAPECが主催されたことで変化し、近代化したことに間違いはない。サミットの成功は、ウラジオストクにとって大いに意義深いものだろう。だが他方で、政府の発展戦略に対する批判的な声もある。現在のアプローチは莫大な国家のリソースにほぼ全面的に依存するのみであり、国家の不安定な予算事情に地域を縛りつけているという識者の声がそれだ[32]。計画の長期的な維持費を、現地がどれほど今後負わされるのかという問題も残されている。これほどコストのかかる計画の財源をどうやって維持できるのか。計画は汚職を促し、むしろアジア太平洋地域でのロシア経済の競争力を低下させるだけではないのか。計画は本当にロシアのアジア太平洋地域への統合のために機能しているのか。このような疑問が現地では生まれている。

これらの疑義は、APECサミット誘致というプーチンとメドヴェージェフの遺産をむしばみ、ナショナル・アイデンティティと国家発展を鼓舞しようとした彼らの展望を逆に掘り崩しかねない。また中央と周縁の不均衡な関係性が露呈するだけでなく、現在の国家体制が直面する矛盾と課題をも浮き彫りにする。高度な政治レベルによる国家主導のプログラムが、成功に負けないほどの失敗をもたらしているとなれば、その責任も問われかねないだろう。

2. APEC2012がもたらしたもの

中央および地方の政治エリートたちが言及していた経済的効果は、2012年のAPECサミットの成果としては未だ現れていない。2012年、ウラジオストクが行政中心地である沿海地方の経済は、確かに5.1％の成長を示し、ロシア国内の平均値である3.4％を上回ったものの、特に強い印象を与えてはいない。というのも、沿海地方には数年にわたって210億ドルもの国家財源が配分されており、APEC開催の直接的成果とは言いがたいからである[33]。人口動態も上向きではない。沿海地方の人口は相変わらず減少傾向にあり、出生率を上回る死亡率に加え、住民流出もその大きな要因である。多くの住民がロシアのヨーロッパ部及び他国へ次々と移住している。2012年には、25,000人もの住民が沿海地方を去り[34]、そのほとんどが高学歴で労働適合な年齢層であった[35]。極東ロシアの主要なビジネ

(31) *Алексей Станиславский.* Парламентарии всех стран, соединяйтесь! // Пресс-релизы. Законодательное собрание Приморского края. 16 января 2013 [http://www.zspk.gov.ru/activity/press/3801.html] (2013年6月9日閲覧).

(32) Lukin, “The Russian Far East.”

(33) *Ibid.*

(34) Почти 2 млн человек проживает в Приморье // PrimaMedia. Февраля 2013 [http://primamedia.ru/news/primorye/12.02.13/256701/pochti-2-mln-chelovek-prozhivaet-v-primore.html] (2013年6月9日閲覧).

(35) Lukin, “The Russian Far East.”

ス誌である『ダリネボストチヌィ・カピタル』の掲載記事によれば、「希望の年」といわれた2012年の人口流出率は22％も上昇している[36]。沿海地方国家統計局による公式な数値もそれを裏付ける。

APEC2012開催後、民間投資が増加したという事実もまた、ロシア国内や海外の情報源からは聞こえてこない[37]。沿海地方知事ウラジミール・ミクルシェフスキーは、2012年の沿海地方に対する海外投資の規模は2011年に比較して二倍に増えたと述べているが、『コメルサント・ヴラスチ』紙の最近の記事では、これは全てシーメンス・ファイナンス社による(四億ドルにまで及ぶ)ものと強調する[38]。ウラジオストクの基幹紙、『ゾロトイ・ログ』の社説は、極めて悲観的な見解を報じた。

> サミット以前からの深刻な(経済的)課題の全てが残されている。この地域は投資家にとってわずかながらも魅力的に映ることはなかった。[……]なぜなら、起業するにも建設地を確保するのが困難を極め[……]収賄やぴんはね、乗っ取りの話題など今さら言うまでもない。慢性化し、治癒不能[39]。

社説の悲嘆はまだまだ続く。「我が国の主な課題は、これまでと同様、もっぱら首都において解決される。中央政府が、国内の全ての地域、あるいは個々の企業の活動に、これほどまでに干渉してくる国家を他に探すのは難しい」[40]。APEC2012の成功に関わらず、地域の重要な諸問題は多くが解決されぬままであり、モスクワでさえ例外ではない。ウラジオストク国立経済・サービス大学のアレクサンドル・ラトキンによれば、ウラジオストクの再生を考える際に地方の関心や利益が軽視されている。

> このような莫大な投資は正当化されえず、そもそも事業自体に対する世論の合意さえ得られていない。[……]結果、何十億ルーブルという予算を費やした不要な建築物が残されることになる。[……]サミットを機に多くの施設が建設され、壮大な演出がなされて上辺は取り造られたが、本質は変わらぬまま。市民がこの事実に気付いていないと言うのはいささかナイーブだ[41]。

それゆえ、国家の発展に関する公的な言説や脱境界化及びアジア太平洋の統合の次元と

(36) *Андрей Пушкарев.* Андрей Пушкарев: Мне мало слышать фразы-лозунги: Дальний Восток нам нужен! Я еще хочу услышать – зачем? // Дальневосточный капитал. 25 декабря 2012 [http://www.zrpress.ru/society/primorje_25.12.12_58605_andrej-pushkarev-mne-malo-slyshat-frazy-lozungi-dalnij-vostok-nam-nuzhen-ja-esche-khochu-uslyshat--zachem.html] (2013年4月30日閲覧).

(37) Lukin, “The Russian Far East.”

(38) *Габуев и Герасименко.* Жизнь после денег.

(39) *Пушкарев.* Андрей Пушкарев: Мне мало слышать фразы-лозунги.

(40) Там же.

(41) Чем недовольны? // Конкурент. 26 декабря 2012 [http://www.konkurent.ru/list.php?id=3743] (2013年4月30日閲覧).

は別に、現地の関心を無視するリーダーシップや政府の政策決定における方針の不明確さに対し、シニシズムが広がっている。アジア太平洋移民プロセス研究所のユーリー・アヴデエフ所長は、『ゾロトイ・ログ』紙のインタビューに対し、更に踏み込む。

> 開発に対する戦略は何もない。地域に何を求めているのか、我々のリーダーはアイデアを持たない。サミットで彼らが述べた内容を思い返してほしい。みな様々な話題に言及しているものの、全てが混沌とし、明らかなものは何もない。今日、モスクワは「プロジェクトを進めよう」と言う。しかし、[……]今日、どのプロジェクトを政府が支援しているのか、どれくらいの期間を要するものなのか、10年なのか数年なのかさえ、明確ではない(42)。

調整不足によるフラストレーションは、APEC関連事業を取り巻く不正の大きさに対する憤りによって一層拡大している。2012年11月、地方のビジネス誌『コンクレント』によると、内務省は、極東連邦大学の建設予算のうち9,300万ルーブル(300万ドル)が使途不明になっていると報じた(43)。不正に関わった疑いで逮捕されたのがロマン・パノフである。彼はペルミ地方の政府議長(ロシア地域開発省の前次官)であった。また内務省は、他にも多くの政府高官がこの事件に関わっており、そのなかには地域開発省の極東司令部のオレグ・ブカロフ部長も関与していたと言及している(44)。ロシア連邦の会計検査院は、この大規模な横領事件の他に、建設事業の技術評価の拙劣さに起因するトラブルや工事の遅滞にもかかわらず、沿海地方当局の預金口座で得られた利子三億ルーブルがあたかもインフラ事業に注ぎ込まれたかのように処理されていることについて、地域開発省の管理部門をさらに捜査するとしている(45)。

不正や使い込みに関する訴えには、他にも9,600万ルーブル(300万ドル)相当の橋梁工事事業用の金属が盗難にあったというものもある(46)。RIAノーボスチがレポートした、2013年1月にロシア連邦議会下院で公表されたAPECフォーラム資金の使用状況に関する会計検査最終報告書によると、81億ルーブル(2億5,000万ドル)以上の財政的不正が確認されたという(47)。これは驚愕するほどの使途不明金額であり、これを契機に2012年のAPECサミットを取り巻く不正処理や横領が広く認識された。この事態は海外投資家の投資行動に甚

(42) *Надежда Воронцова.* Как Приморью “вклиниться в АТР” // Золотой Рог. 18 ноября 2012 [http://www.zrpress.ru/politics/primorje_18.11.12_57686_kak-primorju-vklinitsja-v-atr.html] (2013年6月9日閲覧).

(43) *Валерия Иванова.* Имидж края испорчен окончательно // Конкурент. 14 ноября 2012 [http://www.konkurent.ru/print.php?id=3628] (2013年6月9日閲覧).

(44) “Court Sanctions Arrest of Russian Official Held in Alleged APEC Scam,” *Ria Novosti*, November 10, 2012 [http://en.rian.ru/crime/20121110/177357242.html] (2013年6月9日閲覧).

(45) *Иванова.* Имидж края испорчен окончательно.

(46) При строительстве моста на саммит АТЭС похитили металл на 96 миллионов // Lenta.ru. 17 января 2013 [http://lenta.ru/news/13/01/17/stealing] (2013年6月9日閲覧).

(47) Сумма нарушений при подготовке форума АТЭС составила 8,1 млрд руб // РИА Новости. 21 января 2013 [http://ria.ru/economy/20130121/919128276.html] (2013年6月9日閲覧).

大な影響を与え、チューリッヒ・キャピタル・マネージメントの投資分析の代表であるアンドリュー・ヴェルニコフは、これらの事実がサミットの結果を如何に台無しにしたかを強調する。

> APECサミットの経済的効果は小さい。なぜなら、世界経済のもっとも不運な時期に開催されたからである。道路事業の不正、オペラ・バレー劇場の建設の遅滞、APECサミットのために建設された公的政府買い上げ施設の不正に関わった高官らに対する捜索や逮捕劇などのスキャンダルも明るみにでた。地域に対するイメージは完ぺきに損なわれた[48]。

APECの遺産は、それに関わる事業や施設の維持といった長期的な経済的負担を地域に背負させた。『コンクレント』紙は(行政の信頼度の高い情報源からと特記し)、地域予算から年間、約六億ルーブル(およそ2,000万ドル)が施設維持費としてかかると報じた[49]。サミット準備期間に発表された報告では、たった一つの橋梁の維持に年間15億ルーブル(およそ5,000万ドル)もの特別な予算を要すると報じていた[50]。つまり地元行政が負担する実際の年間経費がどれほどになるのか、未だ不明確な部分が多いのである。沿海地方議会のパヴェル・アシヒミン議員は言う。

> 我々は地域行政から、この六億ルーブルといった数値に関する明細について説明を受けていない。そのため、この額が妥当か否か現時点で判断することはできない。とはいえ、首脳会議に関わる維持費は増大するだろうと考えている。新しい劇場の維持に年間二億ルーブル(600万ドル)を費やすよりも、より有益に財源を活用できる多くの社会的資源があるのに[51]。

2012年末、ウラジオストク市議会が2013年予算を採択したと報じられたが、そこでは、市が保有する資産からの歳入が37%減少すると予測されていた[52]。この減少は、部分的には政府間取引の縮小が予測されていることからくるものであり、また、APECサミットのための資金が配分された「アジア太平洋地域における国際協力センターとしてのウラジオストク開発」に向けた国家的事業の終了によるものである[53]。

こうみてくると、APEC2012の余波のなかで、地元が、ある種の二重の依存状態にはまってしまったことが浮き彫りになろう。自らの発展のために、ロシアとアジア太平洋地域

(48) *Иванова.* Имидж края испорчен окончательно.

(49) *Иван Коротаев.* Во сколько обойдутся бюджету объекты саммита? // Конкурент. 5 декабря 2012 [http://www.konkurent.ru/print.php?id=3684] (2013年6月9日閲覧).

(50) Там же.

(51) Там же.

(52) *Иван Коротаев.* Задача муниципалитета — не распределять средства, а пополнять бюджет // Конкурент. 5 декабря 2012 [http://www.konkurent.ru/print.php?id=3685] (2013年6月9日閲覧).

(53) Там же.

間の経済的及び政治的境界の非物質化プロセスを加速させなければならない一方で、大規模な開発事業を進めるモスクワに縛られ、より依存を強めざるを得ないからだ。ウラジオストク市議会予算・税・財政委員会のウラジミール・イサコフ議長は、こう言及する。

> 私からみると、共同財政の原理に基づかない限り、この尋常ではない規模の課題、つまり道路や住居建設といったものを解決することはできない。地方行政のみの予算でこれら莫大な費用や労働を生みだすことは不可能だ。自治体は、地域の課題に取り組む上で、より高額な政府予算による追加の助成金に期待している。したがって、そのためには交渉を必要とし、譲歩を要するのである(54)。

地方が中央に対し何らかの「譲歩」をしなければならないという事実は、ロシア政府がどこにどれだけの資金を費やすかをモスクワがコントロールしているという、国家事業の前提に対する暗黙の合意を示している。これに付随して、政府が現地の利益を考慮しない、あるいは理解していないという現地の憤りが増幅している。加えてモスクワによる国家主導型の開発戦略は、海外投資家へのアピールや、アジア太平洋地域にロシアが影響力を有するに適切な状況を作り出すうえで、不利益を与えている。ある地方行政区の役人が『コンクレント』の匿名インタビューで要約したように、「地方及び国家予算をねだることは、地に足を付けて経済成長を図るよりも安易だし、ずっと儲かるのだ」(55)。

3. 結論

この数年の間に、莫大な国家財源がウラジオストクというロシア極東の都市を国家主導で再構築するために費やされてきた。政府の多大な恩恵により、ウラジオストクには、アジア太平洋地域の経済的ダイナミクスに対して、ロシアが政治的に関与し、統合を進めるための入り口またはプラットホームとしての特別な役割が与えられた。これは、ソ連期、およびポストソ連初期を特徴づける無視及び無関心とは根本的に異なるかたちでウラジオストクを再イメージ化するとともに国境地域の脱物質化を進めるものでもある。しかしながら、ロシア国内でのまた国土を超えた地域の競争力や結合性を高める代わりに、二重の依存性(ロシア政府の助成金に対する依存と、アジアの市場及び発展した経済・技術に近接することで得られる機会に対する依存)が国家と社会の関係を規定するといった、ある種の反作用が生まれている。本稿では、この二重の依存性が周縁と中央の断絶及び隔絶を際立たせていることをも示そうとした。

国家財政による開発がウラジオストクに一定の肯定的な効果をもたらしたことは疑いないが、同時に、中央集権化された意思決定や非効率的な官僚組織、そして不正といった問

(54) Там же.
(55) *Иванова.* Имидж края испорчен окончательно.

題を際立たせた。今日、ウラジオストクは、アジア太平洋の諸外国との取引や投資へ依存するのと等しく、地域の開発を国の政治家の気まぐれや国家の不確実な財政状況に依存しなければならない。二つの依存は、相互に矛盾することもある。国家主導のアプローチはインフラ整備を促進する一方で、地方行政に対し、競争力のある経済や海外投資に魅力的な環境をつくるインセンティブを損ない、政府からの助成金に頼る文化を背負わせる。

本稿の前段で示したとおり、国家主導による境界地域の変貌は、常に複雑で矛盾した、不明瞭な結果を伴う。政府高官にとって、ウラジオストクは、プーチン政権の指導力下でロシアの業績や能力を誇示し、アジア太平洋地域に対するロシアの影響力の象徴を意味するものであった。だがAPECサミットは、不正や非効率性、集権的な政府のやり方に対する現地の反発など、国家主導型の方針がもたらした失敗としても結論しうる。モスクワがもっていた希望は、現地において異なるかたちで解釈され、変化してしまった。 ウラジオストクに立ち込める深い霧はAPEC2012のために建設された橋梁や劇場やホテルといったものを今や覆い隠しており、アジア太平洋に向けたロシアの影響力や同時に期待されていた国境の脱物質化もまた、地域生活の現実と課題の重みのもと、移ろい始めている。

＊本論文は、Paul Richardson, “Vladivostok 2012: Borders, Borderlands, and Dual-dependency in the Russian Far East” in Sergei Sevastianov, Paul Richardson, and Anton Kireev eds, *Borders and Transborder Processes in Eurasia* (Vladivostok: Dalnauka, 2013) をもとに筆者が大幅に加筆・修正したものである。なお、日本語訳については岩下明裕が監修した。